
パーフェクトビューティーガール！

春風みかん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

パーフェクトビューティーガール！

【著者名】

春風みかん

【あらすじ】

あれが数値化された世界は、日々が闘争となっていた。
その世界では、自分磨きは修行といえるだろう。

ある地区的頂点に立つガールは、女子高生だという。異例の快挙であった。その若さと美貌と卓越した技の数々は、今日も挑戦者を打ち砕いていくのだった。

「90……120……170……200オーバーなんだ、この数値は」

「私の本気はまだこんなもんじゃないわよッ」

「なに……はッ 1000を超えた、だと…? 信じられない、そんなことがあっても……つわああああ…!!」

「甘いのよ。それと、一つ言つておくけど、今まで半分も力を出しえないわよ」

「な……んだ……と ぐふつ」

「ふつ、勝利とはいつだって空しいものよね……が、夕飯の買い物を続けましょ」

私の名前は花魁桜おこひなざくら、高校2年生。

平穏とは言い難い今日この頃だけれど、私は絶対に負けないわ。この力で全てをねじ伏せてやるんだからッ…!

「おーい、桜ー」

「あつ、いけない。今日は放課後に隣のクラスの桃ちゃんと一緒に喫茶店でハイカラな女子高生じょしこうせい」こをするんだったのを忘れていたわ。御機嫌ごきげんよう、桃ちゃん」

「なんでそんなに説明口調なのよ……」

「気にしないでよろしくてよ」

「んまつ、『よろしくてよ』なんて何処の貴婦人だこと、おほほほほー」

「つやッ」

「酷い…! ノッてあげたのに…?」

「あら? 桃さん、この角の埃は何かしら?」

「そ、それは……ワタクシの誇りで『ございましてよ…』」

「上手くねーから」

「うん、ごめん。分かつてた」

「まあ、桃さん、この味噌汁の味は何かしら
む、殺氣……」

「そこかッ」

「うがッ……折り紙手裏剣とは、またレベルの高い武器を……」

「えつ、何!? 桜、何が起きてるの…? そのスカートの長い
女子は誰なの!?!?」

「桃ちゃんは逃げて…!! ここつただ者じゃない、死人がでるわ…!

「ホントなんだかよくわからないけど、とりあえず先生呼んでくる
の！」

「あっ、桃ちゃん…!!…!!」

私は背を向けて走り出す、桃ちゃんを咄嗟に呼びとめた。言い残
した事がある。

桃ちゃんは急停止して、そして緊張を隠せない表情でこのじりに顔
だけを向けた。

私はそんな桃ちゃんに向けて、親指を天井に向けた。

「グッドリック!」

「うん…桜がね」

「食らいえつ、ささがき//サイル

「なぬッ…桃ちゃ

「きやあああああ」

パタリ、と10メートルほど先に立っていた桃ちゃんが倒れた。

「なんてこと…なんてことをするのよ…!!」

高速で牛蒡をささがきしながら飛ばしていくところ、私もこれま
でに見た事の無い技だった。

「くくく、邪魔者には消えてもらわないとね」

「なんてヤツ…!! 許さないわよ…!!」

「イタタ。そもそも桜が私を呼びとめたせいだつたような気がする

……」

「桃ちゃん、喋っちゃダメよ。傷に響くわ……」

「う、うん。ごめん、牛蒡の切れ端だか

「バツ、バツ、う、バツ、え、」

んなツ、激しく、揺らさなでツ、私達ツ、友ツ、達ツ、だよツ、ね
ツ、ぐはツ

「よくも桃ちゃんをこんな目に合わせたな！！ こんなクッタリした桃ちゃん初めてよ!!!!」

なんでもいいや。ガクツ

「貴様がこの地区で1番の力を保持しているという、花魁桜だな」「そうよ、あなたは？　その制服は確か、禊アニメーション専門学校の生徒ね」

「あら、そり。ああ……じやあ、あの、その、どつかのラップとか
D-Hの専門学校の生徒ね」「

「ヨー！ヨー！ メツ、ツシ！ クラブワールドカップおめで
とメツ！ まるでおまえはバルサのメシア！ メツ、ツシ！
空腹の私、行くぜ飯屋！ ヨー！ヨー！」

「桃ちゃんああああん」

「なんでよ」

「お前からのバスだつたろ！？」

「いや、だつて、今のとか、デイフェンスがとりあえずクリアした
ボールが偶然フォワードに渡りました、みたいなもんじやん」
「くそつ、アタイを馬鹿にしやがつて……タダじやすまさねえー

「ちよし、ひるせい」 ちよし、ひるせい、おー、花魁桜、ひるせい、

迷惑、きっと迷惑、居残りで勉強してゐる人たちもいるからつ

「わんわん！ キヤンキヤン！！！！！」

「くそ、不意打ちでアタイの耳を潰そつて魂胆だつたんだね、卑怯者が」

「なんとでもいいなさい。オールドスタイルの不良女！！」

「アタイは強いよ……」

「ふつ、そういう奴に限つて純情乙女つてのが相場よ

「なツ、ばツか！！ ちづーよ！！！ 男なんてなあ……いかい ろだよ、たぶん」

「へえ、そう。なら勝負はそっち方面でいいのね

「そっち方面でどつちだよ

「んー、すすきの？」

「ちょツ、ダメツつて！！ アタイはそこののはガード固めて んだよ」

「ほおーら、見なさい。あんたはそっち方面の力は極端に低いのねえ～」

「ぐ、くそお。これだからモテる女子は……」

「あほほ。憎みなさい憎むといいわ。おほほほほほほほほほー…

…まあ、私も彼氏いないけど

「いないのかよ！！」

「でも、私はその辺は妄想でカバーしているから大丈夫よ。見なさいこの溢れんばかりのオーラ！！」

「なツ！！ このオーラは……花魁桜、やはりあんたはただ者じゃ ないね」

「今頃気がついたの……掃除洗濯家事炊事、勉強運動裁縫料理、友 情愛情ど根性 全てを兼ね備えた私に勝てると思つて？」

「ぐ、くそつ……なんて女子力」

「所詮、あんたはどんなに頑張つても女子力300で終わる器よ」

「なんだと……」

「1歳で社会心理学を学び、2歳でスポーツ心理学を学び、3歳で

言語心理学を学び、4歳で教育心理学を学び、5歳で犯罪心理学を学び、6歳で数理心理学を学び、7歳で経済心理学を学び、8歳で交通心理学を学び

「なんで全部心理学なんだよ……」「

「そして9歳で社会心理学を学び

「1歳で理解できるから」

「…………」、歳二十一の三月三日、こじはらはひの黒政

力は900兆を超えたわ

「す、すゞニ
日本で贈金返しがほんじやなる数字じゃなーか

「ふうふう。」
「それで私の事を知りたい貴様は誰ですか？」

卷之三

卷之三

「餃子（笑）」
「置芯（笑）」
「萌え」

「謝謝你的指教，我再見了！」

「樂記」

ハナシニシ

「アーマー機甲戦車」の略称

卷之三

合氣道の構えから空手に移行、その後柔道の足裏と見せかたでの

グーパンチ。

「！」

状態を反らし寸前でかわす、私の女子力をもつてすればその程度の打撃技を受けることは決してない。

反撃の狼煙は、既に上げられている。

カウンター
それはもう、グーパンチを見切つた時に確定されていた。
技が決まる事、そして

私が勝つことだッ！！！！

なあう

憲法を私独自の解釈により生み出した活人護身術。

拡大解釈から類推解釈までありとあらゆる手段で広げられた解釈

はもはや言葉の域を超る。

そして辿り着く……憲法は、拳法へと姿を変える。

『ウイイイイイーナアアアアツア－－－ 勝者はやはつこの人、花魁桜だあああああ！－－－！』

現れたヒゲの実況は、女子力ファイト公式委員会公認審判である。こうして私の勝利は、記録されるのであった。

「つ、つええ……」

立ちあがれない古風な不良スタイル女子が、跪きながら私を見上げている。

哀れ、いと哀れなり。

いや、しかし、光るものはあった。彼女ならまたきっと立ちあがるだろうという確信があったからこそ、私は出し惜しみせずに戦つたのだ。

「敗者は、女子力が零になる……また1から努力することね。そしてまた、私に挑みなさい」

「つたりめーだよ……次こそは、ぜってー負けねえ……」

「ふふふ、針の穴に糸を通すといひから出直しなさい……アティオス

ス

この甘く、とろけるような味わい。

透き通るような香りを辺りにまき散らしながら飲む紅茶。

「なんでお上品なミルクチーなのかしら、ね？ 桃さん」

「そうですね、ワタクシのレモンチーも中々乙なものでしてよ、桜さん」

「桃さん、小指が立つていましてよ。もっとお上品に

「申し訳『じざいません、幼少よりの癖でしてつい。うふふ

「じゃん、けん、ほん。うふふふふ」

「先々週はグー、先週はパー、今週はグー、これらデータを見て分かる通り来週はチョキの可能性が高いですわね、おほほ」

「ですわね」

「でしてよ」

「「うふふふふー」」

「…………」

「…………いやー、てかさー」

「うふふふふ」

「いつまでやつてんのよー！ そもそも、何でパックのミルクティーになっちゃったのよー？ しかもコンビニの前でー！」

「桜さんが、変な人と戦っていたから日が暮れてしまったのではなぐで？ おほほほほー」

「むうー、飲み飽きたのにコレ…………」

「まあまあ」

「はあ……こんな時に役に立たないわね、女子力」

「この状態つてむしろ女子力マイナスなんじゃないの？」

「あー、まーね。でもこの状態でも上げよう思えば上げられるのよ「え、ウソ？ このパックティーに直接ストロー刺した状態で、しかもコンビニの前なのに？」

「あー、まー、そーね……見たい？」

「うん。ちょっと興味ある」

「えーっと、ゴホン…………や

るーん みるくティー飲・ん・じゅ・う・ぞお」

「うわあ…………痛いけど、かわええ」

「別バージョン…………ハアハア、先輩 これ差し入れデス！！ 疲れたあなたにミルクティーーーー！」

「うわあ…………爽やか青春CM」

「別バージョン…………あつ、ミルクティーが首筋

に零れちゃつたあ。あなたが飲んでくれる？」

「せ、せせせ、せせせせセクシーーーーーー！」

「どうよ、この女子力」

「す、スゲーです桜さん！！」

「まあねー」

「うわー、この人、公衆の面前でスカートパタパタしてるー、一気に柄悪いー」

「ははは、努力の賜物よねー」

「ねえ、桜。私の女子力ってどうなの？」

「どしたの急に？」

「いやー、なんか気になるじゃない。今日みたいな事を田の当たりにすると」

「んー、そうねー。桃ちゃん小さい時に習い」ととかしてた系の人？」

「習い」とかあ……ピアノとおえツ、ちょっと桜…？　ミルクティー落ちてる、地面に落ちてるよ…！　あなた今ストロー咥えてるだけの状態よ…！！！」

なん……だと。ピアノだつて？

幼少期にピアノを習う事が出来る、すなわちそれは家に結構お金があつた証ではないのか。

もしや、こやつ生粋のお嬢様だったのか……そんなはずはない、それならそれに相応しい高貴な女子高などを選ぶはず……なのだが。「スマミングとお、習字とお、茶道とお、バレエとお

オールスターじゃねーか…！お稽古オールスターじゃねえですかね…？」

「ピ、ピピピ、ピピピピアノつてもあ……

「え、うん……」

「行つてたの？」

「ううん。来てたの先生が

「家ピアニスト！！！　高貴の証、家ピアニスト…？」

「でさあ……え、桜？　桜…？　大変、桜がほとんど死んでる…！」

「こ、これが……………パーカークト……………ビューティーガール……………」
ガクツ

次回予告！

「悪いけど、これで終わりよ……桜！！」

「あなたの本当の心を取り戻して！！！」
桃ちゃん ああああああああ

**傷
い友情、夢見た結末、**

『次回。昨日の友は今日の敵』をお送りします』

(後書き)

ちなみに次回はありません。
どもでした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6095z/>

パーフェクトビューティーガール！

2011年12月20日14時56分発行